

FIAFサンパウロ会議報告

A Report on the 62nd FIAF Congress in São Paulo

フィルム・アーカイブをめぐる新たな広がり

とちぎあきら

Akira Tochigi

連載:

フィルム・アーカイブ
の諸問題
第59回

4月20日(木)から29日(土)まで、第62回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議がブラジルのサンパウロで開催された。本稿では、そこで催されたシンポジウムを中心に今会議の概要を報告し、そこで取り上げられた重要な論点をいくつか紹介する。

FIAFサンパウロ会議は、フィルム・アーカイブの現在を見つめなおす、根底的な問いかけの連続であった。その問いのきっかけは、アーカイブ自身というより、むしろその外にある。外部世界の変動にある、と言えいいか。デジタル技術の進展とその広範な普及、映画をコンテンツとして多面的な利用を図ろうとするさまざまな業界、メディアと流通経路の多様化に伴い複雑になった権利問題、そして、かような状況と連動しながら映画に対する施策とその実施主体を再構築しようとする行財政当局。こうした事態が決して一国の次元ではなく、グローバルなレベルで生起しているために、本会議中に開かれたワークショップの一つに冠されたタイトルではないが(「風に吹かれて——変革時のフィルム・アーカイブ運営」)、世界のフィルム・アーカイブが大きく揺れているのだ。しかし、揺れていることは変質することを意味しない。映画フィルムの収集、保存、復元といった作業を活動の基軸としてきたフィルム・アーカイブにとって、その足場から外部の変化を捉え、新たな関係を構築していく、その力量が問われているということなのだ。

2006年4月20日より29日まで開催された今回の会議は、ホスト・アーカイブであるシネマテカ・ブラジレイラの活動が実質的にスタートしてから60年を記念して開催された。1940年代ブラジルのジェットウリオ・ヴァルガス独裁政権下、

数人の若者たちによって始められたシネクラブがシネマテカの前身だが、その歴史は幾度となく名称を変えながら、軍事政権による介入や財政難による消滅の危機を乗り越えてきた苦難の連続であった。1948年にFIAFに加盟したものの、60年代には年会費を支払うことができなくなり、国際社会からの孤立を余儀なくさせられる。また、57年1月には、火災によって所蔵フィルムの1/3を焼失するとともに、建設を予定していた映画博物館用に収集してきた文書類や映画前史および初期映画の資料を失うという惨事にも見舞われた。84年になってFIAFに事実上復帰。89年には初めて自らの映画館をスタートさせる。そして、ようやく97年に、サンパウロ市南部のヴィラ・マリアナ地区にあった町で最初の巨大な屠殺場跡に事務所、劇場、図書室、映画保存庫を集中させ、終の棲家を見出したのである。

シネマテカ・ブラジレイラの栄光と挫折の歴史に思いを馳せてみたとき、国外から加盟機関の代表者や発表者など約160名、国内からアーカイブや業界関係者など約40名の出席をもって、FIAF会議が開催されたこと自体、まずは言い知れぬ感動を覚えずにはいられなかった。また、本会議と連動し、市内の巨大なシネコンで1ヶ月に亘って開かれることになった展覧会「シネマテカ・ブラジレイラ——60年の活動」に、折から筆者が訪れたのが日曜の昼時だったせいもあり、親子連れが引きも切らず訪れていたのにも、大いに感激させられた。決して大規模な展示ではないが、映画前史のさまざまな装置や、映画の仕組みを説明するパネルに加え、映画フィルムの劣化と復元を具体的に説明したコーナーには、目を瞠らされた。

さて、4月24日から2日に亘って開かれたシンポジウムは、シネマテカ内ではなく、市の中心街の一つ、パウリスタ大通りに近い映画館を借りて行われた。FIAFテクニカル・コミッション(TC)の主催により、「デジタルシネマ世界におけるフィルム・アーカイブの未来——過渡期のフィルム・アーカイブ」と題されたこのシンポジウムでは、今回の会議でTC委員長職を降りたアルフォンソ・デラーモ(フィルモテカ・エスパニョーラ)によるオープニング発言に要約されるように、経済と文化遺産保護の両面を常に抱える映画保存の活動にあって、技術の変容が現存するフィルムに対して関心を持たなくなってしまう

うことへの危機感から、技術上の変化を保存の観点から見直していくことを主眼に、さまざまな発表と議論が展開されることになった。なお、初日の午後にはグローヴァー・クリスプとマイケル・フレンド(共にソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント)がコーディネーター役となり、映画保存と復元に関する最新の研究成果や実践報告を行うセッション「ザ・リール・シング」(The Reel Thing)が組み込まれた。以下、シンポジウム全般を通して特筆すべきポイントを挙げてみよう。

シンポジウムのスタートは、ポール・リード(TC)の挑発的な引用からだった。「フィルムは死んだ。デジタルよ、永遠に。フィルムはおこぼれにすぎなくなる——ダメになっても構わないさ(Film will be gravy... But if it starts to go down, it won't bother me.)——コダック社最高経営責任者アントニオ・パレスの発言(2006年1月)である。しかし、だからと言って、闇雲に「フィルムよ、永遠に」を唱える議論が展開されたわけではない。むしろ、デジタルとの生産的な関係を作ることで、自らの足場を固めなおすといった発表が目をつけた。その意味で、アルフォンソに代わり、今回の会議からTC委員長になったトーマス・クリステンセン(デンマーク映画協会)による、デジタル・メディアの最適な保存環境に関する実証報告は興味深かった。ちなみに、磁気テープ、DVD、ハードディスクなどによって、適切な温度設定が微妙に異なることはすでに知られている。たとえば、ニューヨーク近代美術館のようにフィルム・メディアとデジタル・メディアを共に扱う部署において、こうした観点から保存庫の設計に配慮がなされているのは当然かもしれないが、デンマークのように、法定納付制度などとのつながりで、デジタル・マスターの保存について本格的な科学的調査が必要になってくる国や地域も、今後は少なくないだろう。

今回のシンポジウムでは、映画フィルムにおけるサウンドの保存・復元にも関心が寄せられた。サウンド復元で有名なアメリカのラボ、チェイス・プロダクションズのロバート・ハイバーは、撮影所やアーカイブが保有する大量の素材を調査した結果、光学録音であれ、磁気録音であれ、ナイトレートおよびアセテート・ベースのフィルムにおいては、劣化が急速に進行していることを確認したという。その上で、症状に応じた

復元を図るためには、適切な保存用コピーを作成すること、デジタル復元技術の利点を最大限に活用すること、そしてアナログによる映写以外の状況も想定しながら、多様な方法論を選択していくことが大切であるとの持論を展開した。サウンドへの関心は保存や復元にとどまらず、今回のシンポジウムで2KプロジェクターDP100(version 3)を提供したベルギーのメーカー、バルコの技師が、デジタル・プロジェクションにおいて考慮すべき多くの変数(コントラスト/色域/彩度/フォーカス/粒状性/ビット深度/圧縮/解像度…)のうち、サウンドもきわめて重要であることを強調していたのが印象に残った。

アメリカの実験映画作家スタン・ブラッケージの遺族から大量のオリジナル素材の寄託を受け、現在その保存作業に取り組んでいるマーク・トスカノ(アカデミー・フィルム・アーカイブ)の発表にも、目を開かれる思いがした。生前400本近い作品を制作したブラッケージは、保存に従事するアーキビストにとって超難関の一人であろう。フィルムへ直接着色し、傷をつけ、モノを貼り付けるばかりか、一本の作品で白黒、カラー、ネガ、ポジ、リバーサルなど、異なるストックを使い分ける。焼付時には途中で濃度を変化させ、また意図的にスプライズやフレームラインを見えるようにする。普通に考えれば失敗と判断されかねないことを、表現の内実と物質性においてフルに活用しようとしたブラッケージの作品は、まさに「写真化学的五目飯」(photochemical jambalaya)の体を成しているのだ。このような他とは違う唯一のモノ(a distinct and unique artifact)としてのオリジナルを前にしたとき、作家がその作品で何を意図し、いかにしてその作品を作り上げたかを深く理解しなくては、結局忠実な保存などありえないのだということを、私たちは悟るのである。

一方、4月28日に開かれた第二世紀フォーラムは、「FIAFの役割——主要な優先課題」と題し、議長となったジョゼ・マヌエル・コスタ(シネマテカ・ポルチュゲーザ)とパトリック・ロックニー(ジョージ・イーストマン・ハウス)がペーパーを発表する形で議論が進められた。両者は、本題を3つのレベル(アイデンティティ問題、法的問題、デジタル問題)から整理したが、これらが互いに複雑に絡み合った問題であることは、論を俟たないだろう。フィルム・アーカイブやFIAFはもはや当初生まれたときのような孤立した存在ではなく、映画業界や文化施設、教育機関、映画製作者のみならず、DVDやインターネットソフトの制作者など、映画遺産へのアプローチを求めるより広い世界に囲繞されているという状況が、世界中で現出しているからである。マヌエル・コスタは、この状況に、

アーカイブ素材を商品として捉える「映画遺産市場」と、文化的アイデンティティの一要素として捉える「公共的利用」の両面があることを踏まえながら、以下のような問題を提起した。1)フィルム・アーカイブやFIAFは今後、より大きな映画遺産ネットワークの形成に寄与するのか、従来のフィルム・アーカイブ・ネットワークの発展と再定義につとめるのか、2)アーカイブにおける素材の管理運営と、権利者が要求する法的制約との矛盾を解決するために、フィルム・アーカイブやFIAFは、これまでと同様に権利者等との個別契約によって解決を図っていくのか、FIAFのイニシアティブによって国際レベルでの解決策を検討していくのか、3)フィルム・フォーマットがデジタルによる保存、復元、映写技術と共存しうることを前提に、アーカイブや博物館の観点から、オリジナル・フォーマットによる保存と上映、写真化学技術の継承、フィルム製造者との対話を行っていくために、FIAFはどのようなリーダーシップを発揮できるか。

以上の問題提起を受け、ロックニーは「FIAFには映画の保存と上映に関するスタンダードを定義し、それを伝えていく使命があり、このスタンダードが多くの人々に共有されるには、映画保存に関する教育とともに、製作会社や映画作家、撮影監督などと直接対話できる関係を恒常的に作り上げていくことが必要である」ことを強調したが、映画遺産を日常的に管理運営している立場としては、この発言には改めて襟を正される思いがした。ちなみに、映写のスタンダードを普及させるという意味で、今回の会議開催に併せて、ノルウェーの映画技術研究者トーケル・ゼーターヴァーデットによる待望の大著*The Advanced Projection Manual*が、ノルウェー映画協会とFIAFによって出版された。これもまた、FIAFの使命を実現した一つの成果である。

ところで、シンポジウムと第二世紀フォーラムに挟まれた2日間には、4つのワークショップが開かれたが、その一つ、FIAFプログラミング・アンド・アクセス・トゥ・コレクションズ・コミッション(PACC)が主催した「著作権——^{フェアユース}“公正な利用”を定義する」は、第二世紀フォーラムで提起された「法的問題」に直結したものであった。もちろん、各国の著作権法によって規定された映画著作物の利用については、ローカルなレベルでの問題解決が優先されるはずのものだが、その一方で、デジタル・アクセスの急速な発達により、フィルム・アーカイブが自らの負担と営為によって収集、保存、復元した素材を、アーカイブ自身あるいは教育機関等が利用するにあたり、権利者との間で一定の合意形成をしていく必要性がグローバルなレベルで高まっていることも、また事実である。

そこで、「公正な利用」という概念の再検討が浮上してきたわけである。

シンポジウムでは、フランス国立映画センターとゴーモン社との寄託フィルムに関する契約、権利者が不明になった「オーファン・フィルム」に関するアメリカ著作権課のレポートなど興味深い事例報告が続いたが、議論はさらに前へと進み、主催者のPACCから「公正な利用」と「映画へのアクセス」に関するFIAFの方針声明の草稿が提出された。FIAF加盟機関とは最高のスタンダードを維持しながら映画遺産の保存に取り組んでいる団体であり、映画著作権や知的財産権の権利者による不正利用禁止への努力を支持する組織であることを確認しつつ、映画遺産に対するパブリック・アクセスを推進していくために、「公正な利用」の原則に立った上映、公開、展示、運用、加盟機関間の交換の権利と、「オーファン・フィルム」の法的地位の明確化を主張するという内容で、11項目に亘る文書になっている。いささか早急なレトリックに走った観もあり、FIAF倫理規定への言及の欠落や文言への本質論的な疑問など、会場から多くのフィードバックが寄せられた。2008年パリ会議での採択をめざし、今後とも活発な議論が続けられていくことになるはずだ。

残念ながらどれにも参加できなかったが、今回の会議では著作権に関するワークショップに加え、イベロ・アメリカ(アメリカ大陸のスペイン・ポルトガル語圏)における映画遺産の状況、フィルム・アーカイブでの文書化作業におけるデジタル映像化プロジェクト、行財政当局などの主導による機構改革の波にさらされたフィルム・アーカイブの運営とその戦略、といった具合に、超ド級テーマのワークショップが目白押しだった。連日の討議に頭がパンク気味になった筆者は、FIAF名誉会員のロベール・ドードランに、今年の会議の感想を尋ねてみた。すると、こちらのいささか皮肉めいた質問のニュアンスを察してか、彼はこう答えたのだ、「議論にやたら時間を費やしているように見えるかもしれないが、最後には宣言や規定によって今後の行動を形にするのが、FIAFのいいところなんだよ」。

純粋な学術研究機関でもなく、業界の利益を代弁するような団体でもない、各々が組織における実践者として問題を共有し、解決への道すじを模索していくことを厭わないのがFIAFの強みであり、この会議の意義であることを、改めて認識させてくれたサンパウロ会議だった。そして、今回取り上げられた多くの課題は、来るべきアクションへ一歩でも近づくために、来年の東京会議へと引き継がれることになる。



(フィルムセンター主任研究員)